

## 撥音便と撥韻尾 : 主としてmとnの表記に関して

春日, 和男

<https://doi.org/10.15017/2332699>

---

出版情報 : 文學研究. 76, pp.1-13, 1979-03-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 撥音便と撥韻尾

—主として m と n の表記に関して—

春 日 和 男

## 一 はじめに

本稿は、本昭和五十三年五月二十六日、国立国語研究所（東京）において開催された第三十八回訓点語学会記念講演会において発表した論旨を補訂してまとめたものである。筆者はすでに、昨年十月七日、秋田大学における第三十七回訓点語学会研究発表会において「東大寺切書き入れ小見」なる題目の発表をなしたが、本稿はその余論ともなるものであることを諒とされたい。標題の意味は、漢字音の三内韻尾、特に唇内 m と舌内 n の表記法と撥音便の表記法の関係が同一文献において、いかにあらわれるか、その関連を考えるのであって、その音便現象も、いわゆる音韻論的音便の謂いであるから、広義にとるべきこともとよりである。それ故、音便の現象的広がりも、いきおい大となるので、ここでは特に唇内 m 系音便と舌内 n 系音便の二つに限定することまた当然である。

筆者、このたび九州大学文学部を辞するにあたり、日頃各位より蒙った学恩と芳情にあつく感謝を捧げ、ここに謹んで本稿を草する次第である。

## 二 在来の方法と資料

音便の種類を m 系と n 系に区別して考え、その音価を探ろうとするばあい、個々の資料について、表記の基準をい

かに決定するかという問題が起こる。ここでは在来とられてきた方法によって、その応用を試みるものであるが、仮名文字としては、「ん・む」と「ん・ム」両様のものがとりあえず問題になる。つまり、それらの音価がいかなるものであったかを知ることが容易でないし、かなり慎重を要する作業ともなるからである。ともあれ、従来とられた方法は、まず漢字音の韻尾をいかに表記しているか、その表記が、音便形を示すばあいには、どの程度の流用を見るかという方向に考察して行くことである。これは、むしろ訓点語学が多く行なって来た独自の方法でもあるわけである。例えば、遠藤嘉基博士がその著「訓点資料と訓点語の研究」の中に示された竜光院本「法華経」点による撥音便の音価推定などは、これであり、中田祝夫博士がその著「古点本の国語学的研究 総論篇」において「ん・ム」の漢字尾子音の表記について論及され、それを国語における撥音便表記に拡充延長して考察しておられることなども挙げられるべきものと思う。本稿においてもそれらの統制として、もっぱらその方法を採用するものであるが、まず、具体例について従来とられた跡を眺めることにする。

まず、両博士とも平仮名文献として「土左日記」をとりあげておられるので、それから始めることにする。「土左日記」の文体的性格については、種々なる論のあるところであるが、強いていまは $n$ 韻尾のみに絞ってみると、

あらぎなり(十二月二十三日) ふみもてきたなり(十二月二十五日) いひあへなる(一月一日) せぎなり(一月二十日) ししこ(二月四日)

等の $n$ 系撥音便が、いわゆる $n$ 系であるがために

てけ(天気) (一月九日) えず(怨ず) (一月十八日) えず(怨じ) (一月一日)

などの撥韻尾の表記無し形の形であらわれるのと揆を一にすることである。つまり、この際必要なことは、同一本の中で、同一系統の表記体系において、みぎのような関係が純粹に抽出できることが条件となる。実は「土左日記」はこの点必ずしも統一的でないこと、指摘されている通りであるが、まずまず観察にたえうるものというべきである

う。

次に「漢書楊雄伝」天曆二年点（九四八）の例を示すが、これも「土左日記」同様、n 韻尾と n 音便が共に表記無しであられること、相似の関係にあるというべきである。

敦イカッ 奚イカッ

渙て 恣て 禪せタル 棍て

のごとき例ががしばしば指摘されている。

更に石山寺藏「成唯識論」寛仁四年点（一〇二〇）では、ナリヌがナムヌ（ナンヌ）と撥音便（ム）に転ずるので著明であるが、その現象も撥韻尾 n のム表記と揆を一にしているというべきであろう。即ち

為ナムヌ 成ナムヌ 无ナムぬる

損ソム 捐エム 串ヱム 悍カアム

等の例は、それを示すものであるという。<sup>3)</sup>

前述の高野山龍光院本「法華経」点は、明算の施点になるものといわれているが、すでに大矢透博士が同じく龍光院本「大日経」天喜六年点（一〇五八）と同経「供養次第法疏」康平二年点（一〇五九）と共に調査されたものであって、その「法華経」点では、助動詞ムが n 化した古例を示すものとして注意されたのである。遠藤博士は昭和十九年にそれを实地に確認されて

今者我をすて遠く他国に喪ヒンと。

と解説された由、「訓点資料と訓点語の研究」の中で述べておられる。「喪ヒン」のムに相当する個所の撥音符は「>」である旨説明されてあるが、実は、その「法華経」点には他に字音の撥韻尾を示す「>」がないので、「大日経」点など僚本における n 系撥韻尾の表記符号としての「>」をもって、準用された形と見なしておられるのであ

る。また「金光明最勝王經音義」（承曆三年八一〇七九V写）の中に「V」については、ムと異なるn系の撥音符である旨を注記して「次可知V二種借字」の項に

仙せV 善是V 見介V 現下V 返V

等n系韻尾の文字十七字を列挙した後、「件V音ムニ異也可知之」と示してあることにより、ホロベン（喪とん）がム<sub>1</sub>のn化（唇内↓舌内）の例として証拠だてておられる。これは撥韻尾nの符号「V」を他書に求め、それによって、かなり確実にm系音便のn化を推定された例になる。また遠藤博士は、別に字音における唇、舌内の混乱を「漢書楊雄伝」や興聖寺本「大唐西城記」等、いずれも天曆点に実証付けられるため、「土左日記」頃の音便形は、すでにm系がn化していたのではないかと推定される。これは、その著書に見られる極めて特色ある論述箇所でもあるが、もっとも原典の姿を髣髴させる得ると見られる平仮名資料の「土左日記」においてさえ、諸本のままでは「ん」字の音価の判別にいささかの障碍もないとは断言できないのである。特に定家本が貫之の原典を臨模した部分に「ん（む）まれしもかへらぬものを」（二月十六日）と、いわゆる「ん」字の語頭表記があらわれていることから、「ん」の音価がム（mu↓m）として表記されていた例とすることなど周知の通りである。したがってこのことから、「ん」字について、後世の諸写本がその音価をいよいよ曖昧ならしめてしまったというような事情もあって、例えば「女もしてみんとするなり」（十二月二十三日）のような例ですら「ん」の音価についてはムであるカンであるのか、もひとつ明らかでないともいえてくる。

ともあれ、本筋に戻ると、「和名抄」の例などでも、一般にm系撥韻尾のム表記は、

飛檐 比衣无 柑子 加无之 二衣匣 俗云 佐无江乃波舌

等の例をもって、「綺（蟹幡）加无波多」はn系音便形としては混乱の例となり、「簪加无左之・麴加无太知」のムはm系音便形として正しい表記であることがいえるのである。

以上をまとめると訓点資料や古辞書、さらには原典に近い姿で残された仮名資料などでは、撥音便と撥韻尾の表記上の相関関係より、撥音の音価が抽出され得ることが十分実証されるし、その為には、なるべく同一本、同一資料の中で両者の相関関係が指摘されることがより一層望ましいということになる。

### 三 「東大寺切」の書き入れ補入

以上のような音価推定の方法が、「三宝絵詞東大寺切」という、保安元年（元永三年、一一二〇）六月七日書写になる平仮名資料に適用できるものであるかどうか、その実験をここに披露するわけである。

「東大寺切」には本文の行間に書き入れが相当入っていて、それらを吸収しつつ読むことが必要であるが、先の発表でもみた通り、その書き入れの中には、本文には見られぬ新しい表記様式が混在するのである。いまそれらを念の為整理して列挙すると次のようである（用例は顕著なもの一例ずつに止める）。

1、格助詞ヲをオで表記する。舍人迹見トオケミルニ赤檮アカホトオ（中一・一六ウ3<sup>6)</sup>）

2、ホ√オの仮名遣いの誤例 穴太郎アナオヘ（中一・八オ四）、このようにハ行転呼現象がワ行に止まらず、ア行表記に飛躍した例は本文では未出である。

3、拗音表記 会昌クワイシヤウ（中序・五オ2）、開合兩種とも本文にはなく、「すさう」（衆生）（下一・八一ウ1）のごとき直音表記であるか、合拗音（カ行）は「すみとう光如来」（須弥燈光如来）（下十五・二四ウ7）のように仮名表記の上に現わさない。

4、n系撥韻にはレ（ン）の文字を用いる。檀越ダンゴツ（中六・三四オ1、中十一・四四ウ3）、また天子テイシ（中序・五オ2）のごとくイ表記のものがあらわれる。本文にはかかる専用文字はない。

5、t入声のツ表記 敏達天皇ヒシタツ（中一・八ウ4）、本文では「づつ」（術）（中十五・五九ウ5）の一例のみである。

6、ウ音便相当の「うやまふ<sup>テ</sup>」(中一・十一才6)のごとき表記を作為するも、本文にはかかる例はない。<sup>7)</sup>

7、m系韻尾を「ん」表記した例

よくほたいをす、むせんふくの花はしほみた(下序・七六ウ6補入部)

6および7は、前発表において結論<sup>8)</sup>となしたほどに注目すべき現象である。6については「東大寺切」のみならず三宝絵詞(観智院本)全体からも用例が指摘できない。即ち、八行四段活用連用形が接続助詞テに連ってウ音便を起す例としても、またウ音便相当のところをフ表記する例なども、いずれの場合も現れていない。但し、「うやまふて」のような表記は、徳川・五島本「源氏物語絵詞」には、見られるので、この表記は、単に漢文訓読のみならず、和文にもしばしば現れ、しかも「東大寺切」の時代よりもやや遅れているということである。然し「東大寺切」には「しうと」(舅)(中十四・五七ウ4、五八オ2、六〇オ5)のごとき体言の中には、すでにこの形があらわれていることも注意すべきである。この例は「妹イモウト・弟オトウト・蔵人クラウト・客人マラウト」等の形には、かなり古くから見えること説いた通りである。<sup>9)</sup>

#### 四 「東大寺切」における撥音便と撥韻尾の表記

以上、「東大寺切」は書き入れ補入の部分に、本文の平仮名表記よりも新しい表記様式がしばしば現れていることを述べたが、前節7の現象は本題の中心をなすものとして頗る注意を要するところである。本文補入(平仮名)部を精細にすれば次のようになる。

七六ウ

6 たとひあく道よくほたいをす、むせんふくの花はしほみたにおつれともよろつのはなに

7 まきりせむたむかうのもえうせたれともも

8 ろく\のころもにほへるかとし

タトヒ悪道ニオツレトモノノ所ノ王トナルセムフクノ花ハシホミタレトモヨロツノ花ノアサヤカナルニハスクレタ  
リ梅檀ノ香ノモエウセヌレトモロくノ衣ニニホヘルカコトシ (観智院本)

縦墮トモ悪道・能進ム善根ヲ・占菊花ハ萎衰ヘタレトモ勝タリ万花ニ・梅檀ハ焼タキ失トモ如シ薰カ諸ノ衣ニ・ (前田家本)

三本それぞれではあるが、「占菊花」を観智院本「セムフク」とするのは「占」字の韻尾mとしては正しいが、「東大寺切」の「せんふくの花」については、表記上の吟味を要する。つまり「東大寺切」における「ん」字の用法を吟味する必要がある<sup>10)</sup>。

まず「東大寺切」にあらわれた撥音便と撥韻尾の関係である。

経論を見むと(中一・九ウ4) 仏法うせをはらん(同・四オ6その他) したかはんと(同・一四オ6)

推量の助動詞ムは「む・ん」両表記様式があり、恐らく、すでにn化していたことは想像に難くない。字配りの上にも固定したものがあって、

観音のさういりやはてぬらん(中一・五ウ1その他)

などラムは「らん」と必ず書くことが慣行となっていたようで、いずれにせよ「む」よりも「ん」の方が優勢であった。

なみた(涙) (上十三) なむた(中四・二九オ5) なんと(中一・二三ウ4)

等の例は観智院本「類聚名義抄」の「洩ナムタ(法上七)・涙ナムタ(法上七)・密雲ナムタクム(法下七二)」等に照合しても、これら体言の中に生じた撥音便は結果的にすべてm↓nに進んでいた可能性が強い。

なむち(汝) (中十四・五三ウ1) なんち(下十九・二六オ2・3) をむな(女) (下十五・二四オ3) をんな

(中十三・四九オ6) ねむころに(懇) (中五・三二オ6)



等も同然と見るべきであろう。

ここで「ん」の首価を撥韻尾に照合すると

あなん(阿難) らかん(羅漢) 大そう経てん(大乘經典) (以上中序)

へんして(変) (中十六) まれいせん(摩黎山) (下四) えん(縁) (中三) おん(恩) (中十三)

のごとく末尾の韻尾nにあらわれ、例外がない。もつともn韻尾を「む」表記であらわすことは「尺そむ(尺尊)をむほうし(遠法師) えむ(縁) (以上中序) もくれむ(目蓮) (中一) せけむ(世間) せむたむ(梅檀) (以上下序) せむこむ(善根) (下一)」のごとく、かなり指摘されている。しかもm系韻尾は、この他に「む」で表記されることが基準となっていた。

花こむ(蔽) きむめい天王(欽明) (以上中序) しむ殿(寝) ほむ天たいさく(梵) (以上中一)

えむら王(閻) こむかう(金) (中十四) にむせる(任) (中十五)

等は、それを示している。つまり「ん」は「東大寺切」では語末の撥韻尾のnに専用されるものとして特色を有したことになる。されば「せんふく」(占蔔)は「占」または「苦・蒼」のいずれもm韻尾なるに鑑み、唯一の変則な例外となりうるのである。もし「東大寺切」本文の表記に正せば「せむふく」または表記無しの場合

ほふ(凡夫) (下序七九才3) えふたい(閻浮提) (下十八・一ウ)

に従って、唇音を後続する場合が表記を落すことになる故、「せふく」とも表記されるべき字例となる。「東大寺切」の書き入れ補入の部分に例外的な表記があらわれる例となる。

因みに、n系音便が無表記であることは「東大寺切」も同然で、これらはn韻尾を無表記にする字音表記と揆を一にする。即ち

如いすあなり(上四) ふたりの子あなり(上十二) (以上「東大寺切」) 行フナメリ(上三) 見え不給サナリ(上

十一) 求メ難キ物ナ、レ(上十一) 无カナリ(上十二) 被追ニタナリ(上十二) (以上「観智院本」)  
は若(般若) あいせし(禪師) (以上中序) せし(宣旨) しら(新羅) なは(難波) (以上中一) へ化(麥) (中  
十四) にえう(仁耀) えき(縁起) さた(讚歎) (以上中十八) せやくる(施薬院) こくふし(国分寺) せさいと  
うし(善財童子) (以上下十三)

のごとくで、漢字韻尾は、多く語中(複合語の上字韻尾)に表記の無いものがあらわれ、これはn系撥音便の無表記と符合するのである。

以上のことをまとめると次のようになる。撥音便の「ん」表記はm系のnに変化した形として国語中にあらわれるが、撥韻尾の「ん」表記はm韻尾にはあらわれず、n韻尾専用である。ここに撥音便と撥韻尾における重要な相違点が見られる。「東大寺切」ではm系韻尾に「ん」を使用した例が、書き入れ補入部の「せんふく」(占蔔)にあらわれるが、これは新しい撥韻尾の表記であって、本来のものではない。書き入れに本文と異なった、または本文に見ない表記様式が現れる現象と揆を一にする。

## 五 結 語

以上、「東大寺切」の補入書き入れの部分には、本文と異なった種類の、時代的には新しい表記や語形が指摘され、しかもかかる補入部分を用いなければ、文章が完成しないことになる、ここに平安以来、保たれ来った伝統的部分と、主として書写の年代(保安元年)以降の院政時代的なやや下った表記様式とを区別せねばならない。特に前節に指摘したようにn系韻尾の「む」に表記されたものと、m系韻尾が「ん」に表記されたものとは、重要な時代的特色として、それぞれ切り放して処置すべきものとなる。前者は訓点資料では、例えば「漢書楊雄伝」天曆二年点や、「成唯識論」寛仁四年点に用例が見えていること已述の通りであれば、本来的に本文中に見出されたとしても、何の

不思議もないはずである。しかるに、後者はやはり後世的な現象とすべきものである。

これを、観智院本「類聚名義抄」の韻尾表記例によって傍証しようと思う。何故に「名義抄」は図書寮本など原撰本系のものを使用せぬかという疑問を懐く向きもあるであろうが、すでに図書寮本などの和音については、余りに正し過ぎることが証明されているからである。例えばエムの韻尾表記は「塩・淹・奄・閻・厭」等、主として感撰の m 韻尾にあらわれ、エンは「烟・亮・延・演・颯・爰・宛・圓」等主として、臻または山撰の n 韻尾にあらわれて異例なく、トムもまた「貪・曇」等 m 韻尾に、トンは「屯・純・奔・鈍」等 n 韻尾のものにあらわれて異例のないことは、「名義抄」のムは m、ンは n 韻尾を表記したものと考えてよい。しかるに「填禾テム」（法中四九）は観智院本で n 韻尾をム表記した誤例となるが、図書寮本では「填<sup>レ</sup>傳ウツム真テン」とあって正しい表記になっていることなどが、そのような証左となりうる事例である。

それ故、改編本系の観智院本「名義抄」のやや混乱した例の指摘されるものについて、その状況を観察しようとするのであって、時代的にも、分量からいっても、観智院本は誤例の指摘に好都合と思われるからである。

n 系韻尾のム表記のもの（抄出）

カム	艱	一間	禾カム	(僧下一〇六)
後ム	獻	禾後ム	(仏下本一一九)	
シム	震	之刃反	禾シム	(法下六九)
セム	産	禾セム	(法上九二)	
ソム	損	先本メ	禾ソム	(仏下本七三)
テム	田	一填	禾テム	(仏中一〇六)
	*填	禾	傳テム	(法中四九)

展 禾テン テム (法下九一)

ナム 暖 禾ナム (仏中九一)

ハム 伴 蒲旦メ 禾ハム (仏上三四)

ヒム 便 禾ヘン 又ヒム (仏上三〇)

ホム 奔 禾ホム 禾ホン (仏下末三五) (仏下末三三)

マム 曼 一萬 禾マム (仏中一〇〇)

その他用例が多いが省略に従う。中には両様のものや\*印「填テム」のように図書寮本によって正されるものもある。  
m系韻尾のン表記のもの(全部)

カン 感 禾カム (僧中三八)

コン 金錢——コンセン (僧上五)

自ン 甚 自ン (僧下八二)

セン 斬 禾セン (僧中九二)

リン 林 禾リン (仏下本一二六)

これは殆ど総べての誤例である。中にはン・ム両方の表示もあるが、「名義抄」(観智院本)では、いかにn韻尾のム表記が多出し、m韻尾のン表記が僅少で劣勢であったかを知るに余りある。これは「東大寺切」におけるn韻尾の「む」表記の例が多く、m韻尾の「ん」表記の例が補入部に僅かに一つ例外となって見られるのと全く揆を一にする。結論を述べると次のようになる。

一、n韻尾をム(む)で表記することは早くからあらわれ、一つには漢字音の和化する表記としても重要な意義を有したのである。

二、m系撥韻尾をン(ん)で表記することは、未だしい時代が院政初期には存し、用例が局限される。このような撥韻尾の表記傾向とは逆に、撥音便の表記は著しく自由で、m系音便がン(ん)表記を示すことは早くから始まり、撥韻尾表記でm・nの区別が随所に指摘される時期にあっても、撥音便の方はその区別を已に失っていたことになる。

撥・促音便は、元来漢字音の影響を蒙ったものとの説が本居宣長以来、一方で有力に唱えられ、特に新たに国語史における音韻変遷の外部的要因として、このことを強調する向きもあるが、その実態は必ずしも右のごとく一致するものではない。撥音・促音の国語音への介入を漢字音の影響として単純に処理するには余りに複雑である。むしろ多少とも音便現象の影響を漢字音が蒙ったという逆の方向も度外視してはならないと思われる。(五三・一一・三〇)

注

- 1) 遠藤嘉基氏著「訓点資料と訓点語の研究」一三二頁
- 2) 中田祝夫氏著「古点本の国語学的研究」総論篇 一〇〇四頁以下
- 3) 遠藤嘉基氏前記(注1)著書 一三六頁 大矢透氏著「仮名遣及仮名字体沿革史料」一四頁(誤記あり)
- 4) 遠藤嘉基氏前記(注1)、3)著書 一三二頁
- 5) 拙稿「『東大寺切』書き入れ小見」(訓点語と訓点資料 六二輯)
- 6) 拙著「説話の語文」—古代説話文の研究—に用いた関戸家本の表示法による。
- 7) 拙稿「『東大寺切』に見える音便現象について」(記念「語文論叢」五三三頁)
- 8) 前記拙稿(注5)・注7) (記念「語文論叢」五三七頁)
- 9) 前記拙稿(注5)・注7)・注8)に同じ。「せんぶくの花」(山口国文二号)にも掲載予定。
- 10) 記念「語文論叢」五三五頁
- 11) 記念「語文論叢」五三七頁
- 12) 吉田金彦氏「類聚名義抄にみえる和音注について」(国語学第六輯)

# 「三宝絵詞東大寺切」に関する拙論目録

著書

説話の語文―古代説話文の研究― 桜楓社 昭和五十年十一月

論文(引用をも含む) \* 印は「説話の語文」所収。) )

\* 元永本古今和歌集の書写に関する一問題 語文研究第四・五号 昭和三十年十二月

「也」字の訓統考―「なり」の表記としての「也」字― 文学研究第五十四輯 昭和三十一年三月

\* 三宝絵詞東大寺切管見―主として関戸家本冊子と観智院本との比較による― 国語国文第二九一号 昭和三十三年十一月

草仮名による字音表記 文学研究第五十八輯 昭和三十四年三月

\* 続「三宝絵詞東大寺切」管見―字音語の表記について― 国語国文第三〇五号 昭和三十五年一月

聴覚および視覚による表現(下)―「なり」と「めり」の消長について― 文学研究第六十輯 昭和三十六年三月

\* 三宝絵詞東大寺切の研究―関戸家本の本文と用字― 創立四十周年記念論文集(九州大学文学部) 昭和四十一年一月

\* 仮名遣ひ以前―古筆の表記について― 語文研究第二十七号 昭和四十九年八月

三宝絵詞東大寺切追考―「おそる」の活用など― 大坪教授退官記念国語史論集 昭和五十一年五月

関戸家本「三宝絵詞東大寺切」の本文について―「説話の語文」補正― 文学研究第七十四輯 昭和五十二年三月

(以下は主要著書論文目録に載せず)

「東大寺切」に見える音便現象について 退官記念「語文論叢」 昭和五十三年十一月

せんふくの花―m韻尾表記上の問題― 山口国文第2号 昭和五十四年二月

「東大寺切」書き入れ小見 訓点語と訓点資料第六十二輯 昭和五十四年三月

撥音便と撥韻尾―主としてmとnの表記に関して― 文学研究第七十六輯 昭和五十四年三月